

---

---

Perspectives on activity theory

edited by YRJÖ ENGSTRÖM, REIJO MIETTINEN, RAIJA-LEENA PUNAMÄKI

---

---

22. 活動理論、労働の転換、情報システムのデザイン

*Kari Kutti*

**序文**

情報システム (information systems : IS) に対する新しい研究が進行中

IS デザインにおける文脈性 (contextuality) をどのように扱うか

1970 年代、技術指向の見方が、「社会技術的」学派によって攻撃される

IS 研究とデザインに対する新しい概念的基礎に対する研究が始まる

この章の目的：この議論がなぜ現在にまで発展してきたのかを探求すること。

新しい労働は新種の情報技術の支援を必要とし、この要求は古い概念を用いて研究することは出来ないものである。だからこそ新しい研究の枠組み、バックグラウンドとなるセオリーが必要なのである。

以下、IS 研究についての議論の枠組み、その主要な問題について議論し、それらと活動理論の性質の比較を行う

**情報システム研究を取り巻く議論**

IS 研究におけるパラダイムの疑問に関する現在進行中の議論は、Klein と Hirschheim の文章によって特徴づけられる。

- ・ IS の正統性について

- ・ ISD (information systems design) に対する急進的なアプローチの出現も。

(ここでは詳しくは触れず 最近の議論の分類を用いる)

**Bansler と Nurminen**

彼らの研究における 3 つの方向性

システム理論的機能 (systems theoretical)

システム社会技術的機能 (systems sociotechnical)

Nurminen ... 人間的機能 (humanistic)、Bansler ... 重大な機能 (critical)

Nurminen が新しいアプローチで強調するのは認識活動における個人の問題。Bansler は新旧のアプローチの違いを認知と衝突の受容にあるとする。共通点は、システム理論的、社会技術的学派の見方にある(「制御」と「規制」(control and regularity))。

**Hirschheim と Klein**

- ・ 彼らは Burrell と Morgan (1979) の分類 (組織化理論に適用される一般的な社会的理論を分析することから生まれたもの) を IS 領域に適用する

- ・ 彼らの認める 4 つの分類

- 機能主義 (functionalism)

- 社会的相対主義 (social relativism)

- 合理的構成主義 (radical structuralism)

- 新人間主義 (neohumanism)

**Iivari**

- ・ 7 つの学派の存在を認識

- ソフトウェア工学 (software engineering)

- データベース管理 (database management)

- 経営情報システム (management information systems)

決定支援システム (decision support systems)  
履行研究 (implementation research)  
社会技術的アプローチ (sociotechnical approach)  
情報理論アプローチ (infological approach)

彼は明確な分類を目指しているわけではない。この結果には類似性があり、主な区分特徴というのは意味のあると考えられる社会的側面の程度であるから、それらの存在論的仮定は基本的に同じである。それら倫理的価値観は手段・結果指向であり、主に組織の経済的な最終目標に依存している。

## 比較

これら分類には違いがあるが、類似性もある

Iivari の結論 ある正統性 (orthodoxy) が存在すること、つまり、基本的な仮定を多く共有している学派群が存在していることを証明しているように見える。その一群を大ざっぱな分類における全くの例外であるとしてしまうのは誤りである、ということを示している。

社会技術的学派的捉え方... Bansler と Nurminen：完全に分離した部類

Iivari：些細な違い

Hirschheim と Klein：明らかにせず

Bansler と Nurminen は部分的に同じ部類をもつが、そこにはいくつかの正統性がある。両者とも Hirschheim と Klein の分類軸を1つ用いているように見えるが、同じものではない。Nurminen が主観論・客観論的分類に見られる特徴にのみ着目しているのに対し、Bansler は order-conflict classification においてのみ区分している。

...以上見てみると、正統性に関するコンセンサスがあるように思える。また社会技術的アプローチは、その正統性とは区別される。加えて、出現しつつある新しいアプローチの多様性はそれとは全く反対のものとして明らかにされている。

## 新しいアプローチが発生した理由

Iivari：この発展の理由を考慮せず

Bansler と Nurminen：人間主義的な見方の出現をコンセンサスへの抵抗によるものとは見なさず、新しい分散されたシステムの形式への要求によるものとする

Hirschheim と Klein：機能主義的な正統性は、IS の社会的基本的な性質への不十分な理解によって引き起こされたシステムの法制化と履行の問題と争ってきたということを提案することによってこの発展を説明する。また、その変化の起源は個々のデザイナーによって受容される新しい価値や姿勢にあることを認識している（社会的変化が、IS や ISD 研究に大きく影響を及ぼす：Klein & Hirschheim, 1987）。

< 著者の意見 >

- ・新しい見方は社会における変化によって引き起こされるものである、という点には同意。
- ・その変化は価値や姿勢を変えることを通して ISD 研究へ向けられる、というのは言い過ぎ。

...以下、このことに関連して、労働組織における現在の変化を考察する

## 労働組織の新しい形式についての議論

労働組織の歴史的発展を記述するために、以下のようなモデルを用いる

手工芸 (handicraft)

- ・労働の形態に由来。方法や道具がその状況で発展させられてきた。Braverman (1974) の言葉を用いるなら、創案と実行 (conception and execution) は統合されている。そこで

用いられる道具は単純であるが、労働の目的の性質の理論的専門知識に基づいている訳ではない。

- ・原初的な労働の形態は、「師匠 - 徒弟」の関係。特別な労働の文化に馴染んでいくことによって、言葉に表現されない技術、知識を学ぶものであった。

テイラー化されたもの (Taylorized)

産業革命以来発展してきた労働の形態に由来する。殆どのフロア労働 (floor work) はこのタイプで、言葉に表されない知識では不十分で、目的や生産の手法と関連のある知識は集積され、機械や指導に具体化されなければならないというもの。合理化された労働では労働者の心情的離反が問題となり、さらには質の保証の問題にもつながる。Braverman (1974) によると、科学的経営の重要な概念は、創案と実行の厳格な分離である。

人間化されたもの (humanized)

合理化された形式に反対し、それによって作り出された問題への解決策として発展してきた労働の形態に由来する。その起源は社会技術的学校にあり、それは労働者自身の管理による動機付け、組織の人的資源へと注目を集めさせるアプローチをとる。文明化された労働において、労働過程において自主性はあるが、製品のデザインなどその他多くに影響を及ぼすことはない。

では、出現しつつある労働の新しい形態は、文明化された労働の形式とどのように区別するのか？ (以下本文引用からその形態のいくつかの側面を描画しているもの)。

- ・「労働者は自己決定権がなく (ルーチンワークをこなすもの)、単なる従属物...受動的」と「労働者は領域を越えて協同し、組織について思考するもの...能動的」との対比
- ・労働者と製品、賃金、責任の関係

出現しつつある新しい労働の形態の特徴は、IS の望ましい特徴と共に図 27.7 で比較されている。

注目すべき類似性

- ：労働を発展させることに対する要求と、IS 研究に対する新しいパラダイムを生み出そうとする試みの間におけるつながりというのは、IS 議論内で認識されてきたものよりも、かなり直接的なもの

### 活動理論と IS 研究の問題

どのような類の問題に IS Community は直面しているのか？

困難の 3 つの領域

- ・能動的個人 (active individual)
- ・社会の変化 (societal change)
- ・複数の学問分野 (multidisciplinary)  
を IS 研究は扱うことが出来るようになるべき

IS 議論における主要な批判

「IS の利用者は受動的で、組織を分析する組織的情報の一部」

IS は組織的展望を維持しつつ、能動的個人を支援すべき

さらに、Human-Computer Interaction (HCI) 研究コミュニティでも議論

...能動的個人の軽視への批判 ("human factor" から "human actor" へ (Bannon, 1990b))

これら議論は個人的なレベルに限定。but 集合的、社会的な段階が考慮されたテーマと関連する 3 番目の議論：CSCW (computer-supported cooperative work)... 「協同的労働」

- ・IS 研究は、社会心理学、経済学などの他の領域も考慮にいれる必要がある。また、IS をデザインするという事は、その文脈における変化に熟達することを意味するし、そ

の分析やデザインのための概念的道具は、静的で上手く定義された環境の暗に意味された仮定条件を含んでいる。

- ・アプローチの多様性 IS 研究が状況に上手く対応することを可能にするよう提案  
...しかし、ブレイクスルーを生み出すには至らず。活動理論はよりよい示唆を与えてくれるのではないか？

### 【活動理論(activity theory)】

- : 研究されるべき対象(object)において、個人と社会的な段階の間関係を適切に維持することを支援する。特に個人的、社会的転換において新しい特徴を把握する必要がある時に有効(例: HCI, CSCW, Information Systems)。
- : 学際的。活動は研究の最小限で意味のある対象であると仮定するならば、どんな学問によっても全体としての活動は徹底的には研究され得ないということを認めるべき。事実、いくつかの学問領域は、研究の目的、すなわち活動によって形成される文脈については同じ文脈を実際に持つべきであるという結論に至ってしまう。研究の多様性を維持するため、活動の異なる側面だけでなく、その他の文脈を形成する部分も考慮に入れられるべき。
- : 発展的過程を研究し、それに熟達するための概念的装置を精巧に作り上げるものであり、文脈を文化的人工物に媒介された動的なシステムであると見なす。さらには、活動の文脈を内的に矛盾した形態(internally contradictory formations)とする。
- : メソドロジカルアプローチにおいては、干渉主義的。人間を活動の文脈における創造者であると見なすことによって、実践において文脈を再構築する方向に向かい、その結果人々は単なる客体や従属する一部ではなく、創造者としての役割を奪還することになる。  
...このアプローチの受容が導き出すもの

Developmental Work Research : DWR (最近の労働組織における活動理論の適用)

### 結論

- ・現在進行中の労働における転換と IS 研究におけるパラダイム的問題には関連がある。
- ・新しいアプローチは、その変化に熟達するために構築されるべきであるし、活動理論は個人的、社会的転換を研究するために綿密に発展させられた。
- ・活動理論の潜在性は、実践に於いて例証されるべきである。